

# 三和の風

平成29年2月3日

NO.18

## 美保ちゃんのこと クラスとは何だ

「先生、お久しぶりです」

先日、帰宅途中に立ち寄ったコンビニの駐車場で、私が17年前に担任をしていた教え子に声をかけられた。彼女と会うのは、2年前、彼女たちが30歳になるのを記念して開いた同窓会以来である。

「先生、新聞読みました？ 中国新聞に鈴木三重吉賞に選ばれた作文が載っていて、美保ちゃんの子どもの作文が載っているんです」

たった22人の小さなクラスだった。私は、2年間持ち上がりで担任をした。小さなクラス故のトラブルも多かったが、みんなにはそれぞれ夢があり、その夢を実現させたもの（美容院開店、競馬の騎手、保育士、看護師、造園業・・・など）がいる一方で、挫折し新たな道を模索しているものもいる。また、両親の急死により、若くして一家の大黒柱として逞しく生きている者もいる。

そんな彼らが17年たった今でも大切に持っているものがある。それは、中学3年生の文化祭後のクラス集合写真がプリントされたテレホンカードである。

あの時の文化祭は大変だった。自分たちでシナリオを考え、創作劇をするという。そこまではトントン拍子に決まったが、その内容が決まらず、文化祭が刻々と迫るのに、我が学年は「あーだこーだ」というばかりで、何一つ決まらない。そればかりか、その責任を仲間に転嫁する有り様だ。しかし、私は腹をくくった。どんな状況になっても「自分たちでやると決めたことには口出ししない」と。

そんなある日、生徒たちはとうとう切羽詰まって、私に助けを求めてきた。私は、劇の実行委員10名ぐらいの前で、「自分の今のしんどさを正直に出すところから始めなさい」と話した。

そこからである。延々と4時間に及び泣きながら、思うようにいかない辛さや家族の中の悩み、将来の不安、クラスの間関係のしんどさ等を語りだした。ここはクラスとしての「勝負所」である。4時から始めた話し合いは8時過ぎに終わった。結局、彼らはこの4時間に及んだ話し合いそのものを劇のシナリオとし、自らの苦悩や喜び、夢や不安、仲間の大切さを見事に演じきった。

「ハードルを越えさせないとい生徒は力がつかない」というが、まさにハードルを越えた後のすがすがしい表情がプリントされているからこそ、彼らは17年たった今でもあのテレホンカードを持っているし、自信や誇りにしている。

ところで、この文化祭の後、中学生生活最後の3学期に自ら学級委員に立候補したのが美保ちゃんだった。美保ちゃんは、口数が少なく物静かで表にでるタイプではない。あの4時間の話し合いの時は、「自分の家族のことや自分に自信がないこと」を泣きながら語った。その後、自分ももっとみんなを信頼して、みんなの役に立ちたいと立候補したのだ。勿論、そんな彼女をみんなは受け入れた。高校入試で、たった一人選抜Ⅰの不合格通知をもらったA君には、みんなが選抜Ⅱで合格するよう支援した。その中心は学級委員の美保ちゃんだった。そんなクラスに成長できた節目はあの「4時間の話し合い」に他ならない。「小中9年間一緒だから仲が良い」とか「幼なじみだから人間関係が深い」とうのは幻想である。そうでないクラスはいっぱいある。

そんな美保ちゃんの悲報を聞いたのは、彼女たちが24歳のとき。今から8年前である。二人の幼な子を残して胃がんのため逝ってしまった。

早速、新聞を読み返し、美保ちゃんの子どもの作文を読ませてもらった。（裏面に掲載）中学時代の彼女のこと、病と闘いながらも子どもを思う母親としての姿、天国にいった母親を慕う美保ちゃんの子どもの純真さ・・・私は涙が止まらなかった。

コンビニの駐車場で会った彼女のように、あのクラスの21人の同級生の心の中ではいつまでも美保ちゃんは生き続けている。